



オオタカは、まもられた。しかし……

オオタカに
雛が生まれ、育ち、
やがて立派に巣立って空を
飛ぶ——このいきさつをじっくりと観察
できた、バード・ウォッチャーは最高のあわせ
にひたることだろう。しかし、そうはいかなかった。
密猟という、法律違反者の存在があったのである。

密猟に、立ち向かう

オオタカを密猟者から守るため、日本野鳥の会
の東京・埼玉などの会員や、東京都鳥獣保護員
の有志が「オオタカ密猟対策協議会(代表・笹川
昭雄氏)」を結成したのが、昨秋のことであった。
これまで、東京近郊でも数年来、観察中の雛が取
られて1羽も巣立っていない状態を見かねて立ちあ
がったのである。他にも、すでに栃木県の有志が
密猟防止24時間監視態勢をしいている。ここでは
昨年、1つの巣は無事だったが、もうひとつは雛の
すべてを持ち去られた。密猟者はその後、オオタカ
だけでなくクマタカやフクロウの雛を取ったり、監
視者の車のタイヤを傷つけたりしているという。
笹川氏によれば、密猟者は全国組織の網を張
っていて、ワシタカなど猛禽類の巣を発見すると、種
類を問わずすべてを取る。モミの大木の、地上20
数メートルの枝のつけ根にある巣までよじ登って
取る巧みさは並みのワザではない。雛は彼らの
手によって育てられ、調教されたオオタカは、
1羽50〜70万で売買されているとか。

これ
が日本では
「鳥獣保護および狩猟
に関する法律」によって捕獲が禁
じられているはずの、猛禽類の現状だ。
東京と埼玉の県境にある狭山丘陵。ここは国
の鳥獣保護区で、オオタカはその中の特別保護
区内で繁殖している。5月からテントに泊り込
んで密猟監視を続けるメンバーは全員ボランティア。
みずからすすんで参加した、鳥好きばかりである。

24時間監視のテントの中で

さまざまな仕事を持つ人が、仕事のあと、または
休暇をとり、入れかわる。応援の老人がカンパを
置いて行く。若い姉妹が来る。学生がグループで
現われる。地元の公務員が水や氷を持って往復
する。ハンディ・トーカーの音が響き渡る。パトロール
の人々が交代する。警報装置を点検する。監視
装置を調整する。——探鳥会の、あのうきうきした
気分はもうろくなく、夜とともに緊張が高まる。
神経を戸外へ向けていると、こちらをうかがう気配
を感じるという。すっかり自然に敏感になったとい
う人もいる。闇をはじめて知ったという人もいる。
『なぜオオタカを守るのか』『取るやつがいるから』
明快な答えの背景にあるものは、自然環境のバランス
がにわかれることへの心配であり、自然環境を破壊する
ものへの怒りであり、地球の未来を真剣に考える心
である。『そうまでして取りたいのか』『自分の子供
がいなくなったらどうするか』森の中のテ
ントは、環境保護と、密猟者
について、愛鳥家の声
が満ちた。

さて、
後日談になる
が、オオタカの雛は、見事
に成長し、3羽が巣立った。笹
川氏は「巣立ったら、それで良い」と言った。
栃木県でも成功したが「監視行動によって、猛禽
類保護については一般にかなりアピールできた
と思う。ただ、この活動では何百人かかっても守
れるのは1つの巣だけだ。ことし他のところでは
密猟はなくなっていない」という報告が、日本野
鳥の会本部に寄せられている。笹川氏も「司法権
を持った人がきちんと取り締まりをしてほしい。オ
オタカをふくめた野鳥全部が安心して住める環境
保護が大切なのだ」と語った。——のべ1000人
をこえるボランティアの活動で、狭山丘陵の3羽の
オオタカは守られた。しかし、来年の繁殖期は、安
全という保障はない。『そうまでして取りたいの
か』……すべての野鳥の声を、代弁している言葉だ。



ヒトの心に「トリの保護区」を

財団法人 日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

●この愛鳥キャンペーンシリーズは、日本鳥類保護連盟の指
導のもとに日本野鳥の会、各自然保護団体の有志の方の協力に
より、サントリー株式会社が制作するものです。野鳥保護
を通じて、環境と自然を守ることの大切さを訴え、
野鳥と人間がなかく暮らせるゆたかなで美しい
地球を未来へ引きつづけるために、さまざま
なアングルで展開してまいります。
どうぞご支援を——。

